

## 『非文字資料研究』への寄稿について

人類文化の研究は、人間それ自身と人間が織り成す社会を研究することを目的とするが、その研究は文字で表現された資料を主な対象として行われてきた。しかし、人間の活動とその結果生み出されるものは、文字で記録されたものに止まらない。絵画・写真・映画・建築・民具・音声などの形で記録されたり、地形や景観あるいは人間の身体それ自身に刻み込まれたりもする。さらに、匂い・しぐさ・味覚・感触など「記録化」することが難しいものも、人類文化を構成する大事な要素である。

非文字資料研究センターは、そのような文字以外の記録及び文字では表現されにくい人間の諸活動を「非文字資料」として体系化し、それを研究する新しい方法を開発し、より包括的な人間と文化の理解にいたることを目指している。21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」(2003 - 2007年度)以来、わたしどもは、その目的を達成するために <図像><身体技法><環境・景観>のなかから研究課題を絞り込み、共同研究を展開してきた。この共同研究は、歴史学・民俗学はもとより、文化人類学、比較文化論、美術史、建築史、災害史、情報科学などを専門とする内外の研究者によって支えられてきた。

このように多様な学問的広がりをもつ非文字資料は、世界各国の地域文化の諸相を具体的かつ可視的に示す絶好の資料であるとともに、資料自体が多層的な時代・地域において蓄積されてきた背景をもっているため、研究方法としても比較歴史的な視点を求めるものであり、ひいては、人類文化研究の総合的・学際的な発展の可能性を有している。

しかし、研究資料の分析指標の設定、意味の解説という困難な作業には、研究概念と成果の普遍性が求められる。また世界共通の標準的・普遍的な研究資料の資料化・体系化を行うには、世界各地の関連学問分野の研究者による相互検証が不可欠である。本センターの研究活動においても、関係研究者との共同作業を必要としている。

『非文字資料研究』は、世界の各地域において活躍されている非文字資料研究者からの寄稿を歓迎し、本誌が多分野にわたる研究者相互の学問的遭遇の場として発展するとともに、人類文化の豊かな研究に寄与することを期待する。

寄稿をご希望の方は、当センターのホームページをご覧ください。執筆要項等の詳細をご確認ください。

エントリー募集期間：前期 1月～3月 後期 7月～9月

原稿締め切り：前期 3月末 後期 9月末

※原稿ご提出後、査読があります。

エントリー用紙：当センターのホームページよりダウンロードしてください。

執筆要項：当センターのホームページよりご確認ください。

表記・書式細目：当センターのホームページよりご確認ください。

エントリーシートの提出・お問い合わせ先：非文字資料研究センター

E-mail: [himoji-info@kanagawa-u.ac.jp](mailto:himoji-info@kanagawa-u.ac.jp)

ホームページ：<http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

## 主な研究活動

### 運営委員会

2019年度

- 第8回 2020年1月20日 (1)2020年度研究班体制(人事)について、(2)2020年度「海外提携研究機関若手研究者派遣実施要項(案)」について、(3)2020年度「海外提携研究機関若手研究者招聘実施要項(案)」について、(4)2020年度「奨励研究募集要項(案)」について、(5)2020年度公開研究会企画について(租界・居留地班)、(6)センター運営委員会の体制について、(7)2020年度予算のヒアリングについて
- 第9回 2020年2月25日 (1)非文字資料研究センター 2019年度事業報告、(2)非文字資料研究センター 2020年度事業計画、(3)『神奈川大学非文字資料研究叢書』運用方針(案)

### 研究員会議

2019年度

- 第4回 2020年1月20日 (1)2020年度研究班体制(人事)について、(2)2020年度「海外提携研究機関若手研究者派遣実施要項(案)」について、(3)2020年度「海外提携研究機関若手研究者招聘実施要項(案)」について、(4)2020年度「奨励研究募集要項(案)」について、(5)2020年度公開研究会企画について(租界・居留地班)、(6)センター運営委員会の体制について
- 第5回 2020年2月26日 (1)非文字資料研究センター 2019年度事業報告、(2)非文字資料研究センター 2020年度事業計画

### 研究会

#### 研究班研究会

2019年度

- 第4班 日本近世生活絵引一行列から見る都市生活空間—  
2020年2月29日～3月1日
- 第9班 戦時下日本の大衆メディア研究  
2020年2月29日

### 現地調査

調査テーマ	日程	場所	調査メンバー
第二期『東アジア生活絵引(中国江南編)』編纂のための基礎作業	2月18日～2月19日	蓬左文庫	松浦智子
東アジア開港場(租界・居留地)における日本人の諸活動と産業	1月30日～2月2日	海に見える杜美術館	田島奈都子
中世景観復元学の試み—北九州市若松区の惣牟田集落を事例として—	3月12日～3月14日	北九州若松区	金子浩之・松原典明

### 編集後記

本センターは今年で13年目を迎えました。12年を経たこととなりますが、12年という年数は中途半端のように思えるも、干支の観点からすると「えと」を1巡したことになります。12年を5巡すると60年、すなわち還暦ですが、12年という期間を人が成長を果たす際の一つのまとまりを持つ時間の幅と見なすならば、新たな「えと」の始まりは人生の次のステージの始まりと捉えることができるかもしれません。

とすると、本センターも新たなステージへと足を踏み入れたこととなりますが、折しも今年度から第五期の活動が始まっております。今号のニューズレターでは各研究班の紹介がなされ、また公開研究会の実施報告や招聘／派遣研究員による報告なども盛り込まれ、活発な活動の様子が窺い知れる内容になっているかと思えます。

新たなステージで私たちは非文字資料のどのような魅力を拓いていけるのか、このことを意識しつつ引き続き活動に努めてまいります。(H.N)

### 表紙紹介

1850(嘉永3)年に薩摩藩主とともに江戸に参府した琉球使節を、江戸勤番中であつた宇和島(現・愛媛県宇和島市)藩士・上り行敏が描いた絵巻『琉球人行粧』(鹿児島大学附属図書館蔵)の一部である。使節は6月に那覇港を出た後、薩摩を経由して片道約1000キロを旅し、10月末に江戸に到着して40日ほど滞在した。ここに描かれているのは、中国風の衣装をつけた琉球の楽隊の一部と、警固役の薩摩の足軽、国王の書翰を運ぶ掌翰使という役職の琉球人とその従者である。一對の虎旗には「飛虎」という想像上の動物が描かれ、赤い牌に記された「中山」とは琉球の国号である。減多に見ることのできない「異国人」の珍しい服装や音楽は、江戸時代の日本人の耳目を集め、沿道には見物人が詰めかけた。上り行敏もその一人で、絵巻の序文に「常にも見ぬ異国人のさまもいとめづらしく一時の壯観とやいわん」と記している。(M.W)